



神戸市立桂木小学校合唱団のみなさん

志半ばにして犠牲になられた皆様のご冥福を心からお祈りするとともに、最愛の家族を失い、苦難の26年を生き抜いてこられたご遺族の皆さんに、改めて心からお見舞いを申し上げる。震災後に生まれた教職員が増えていく一方で、震災時学校に勤務していた教職員の多くは退職を迎え、当時のことを知る者は減少



西上三鶴兵庫県教育長

県教委を代表して、犠牲になられた方々の御靈に、深く哀悼の意を表す。今日の復興は、震災により亡くなられた方や、負傷された方、財産を失われた方など、多くの犠牲の上にあることを、私たちは決して忘れてはならない。

昨年、震災から25年という節目の年を迎えた。兵庫県としては、新たなステージでのとりくみをすすめている。また新型コロナウイルス感染症の拡大や、グローバル化・情報技術の発展、多様な価値観のある

震災の経験や教訓を教育活動に生かすと、よりくみについては、11月に開催した兵

庫県教育研究集会の「生きる力を育む教育」分科会で、問題提起と討議を深めた。参加者からは「コロナ禍の一途をたどっている。私たち、毎年1月17日に皆

范围にわたり甚大な被害がもたらされた。被災地の教

育復興のため、子どもや学

校、教職員にかかる支援の一助になればと、連合や

兵庫県の「わかば奨学生金」

の助成金も設けられ、多くの家庭が支援を受けた。また、連合兵

庫の自然災害等救援基金

「糸」カンパ、兵庫県学校

厚生会の「わかば奨学生金」

東日本大震災から10年、熊本地震から5年を迎える

被災地域から兵庫県内の小・中・特別支援学校に転

入している子どもたちの支

台風による災害が発生し、

今年度は新型コロナウイ

ルス感染症対策のため実施

される。また、新型コロナウ

イルス感染症の拡大や、グ

ローバル化・情報技術の発

展、多様な価値観のある

ア活動や県・市町の総合防

災害への支援、児童生徒、教職

員の心のケアに取り組んで

いる。これまでのEART

Hの活動や想いが理解さ

れて、教職員による支援チ

ームが、宮城県、熊本県に加

え、三重県でも2日前の15

日に発足した。これも復

興支援の一つの成果であ

り、誇らしく思う。

これから子どもたち

は、様々な自然災害や新た

な感染症に直面し、克服し

ていかなくてはならない。

災害等から自らの命を守

り、主体的に行動できる力

を育むことが大切である。

これに加えて、助け合いや

ボランティア精神など等の

共生の心、人間としてのあ

り方、生き方を考えさせること

が私たちの責務であると考

える。

兵庫の防災教育を一層、

発展・充実させていくこと

が私たちの責務であると考

える。

阪神・淡路大震災の時、

震災発生から2日後にしか

学校にいけなかつたことが

ないことが一番良い

全員無事で安堵した。いつ

もそばにいてくれる家族が

いなくなつてしまふかもし

った。恐怖を初めて感

じた。

私は小学校に避難するこ

ともうすでにたくさんの人

が避難しており、いつもは

元気な子どもたちの姿が溢

っていた。教室もたくさん

の教育活動に生かして

いた。今までは、いやだなと

決意を新たにしてい

る。

このコロナ禍にあつて

は、誰もが感染するかもし

れないものであり、震災の

教訓から学んだ「お互いに

支え合い、励まし合い、困つ

た時はお互い様」、このよ

うな当たり前の「共助」のよ

うな人間関係づくり、学校づく

り、地域づくりに今一度ど

りくむ必要があると実感し

ている。

昨年も全国各地で豪雨や

台風による災害が発生し、

震災から26年

変化している。こうしたこ

とをふまえて、防災教育や

体験教育など、兵庫らしい

教育を継続しながら、さら

に発展させていかなければ

ならない。

阪神・淡路大震災から26

年。日頃の生活や街並みの

中で震災の跡を見ることは

なくなつた。児童生徒は震

災を経験していなければ

なりません。児童生徒は震

